

成人看護学臨地実習における

専門・認定看護師等同行実習での学び

Learning through Practicum which Students Accompany

Specialized/Certified Nurses in Adult Nursing Practical Training

大野 和美¹⁾

Kazumi OHNO

柴田 和恵¹⁾

Kazue SHIBATA

臺野 美奈子¹⁾

Minako DAINO

前田 明子¹⁾

Akiko MAEDA

坂野 恵子²⁾

Keiko SAKANO

要旨

成人看護学臨地実習における専門・認定看護師等同行実習での学生の学びの内容を検討するため、A看護系大学の4年生81名で協力の得られた64名の内、専門・認定看護師等同行実習をテーマ選択した45名のレポートを質的帰納的に分析した。

結果、専門・認定看護師等同行実習における学生の学びとして、『専門・認定看護師等の職場の現状』『専門的な看護ケアを必要とする患者の現状』『専門分野における看護実践の内容』『患者への直接的ケアの実際』『看護職への指導および相談、連携』『多職種・他施設との連携』『教育活動と対策の推進』『活動の充実へ向けた基盤作り』『活動の充実および拡大』『専門・認定看護師等に対する新たな認識』『視野の広がりや意欲の向上』の11のカテゴリーが抽出された。更にこれらは、【専門・認定看護師等に関わる現状の理解】【専門分野に特化した看護活動の理解】【専門・認定看護師等の課題】【学生の認識の変化】の4つのコアカテゴリーに分類された。

学生は専門・認定看護師等が行うより専門的な看護活動に直接触れることにより、専門・認定看護師等に対する新たな認識や視野の広がりや得られ、高度な知識と技術の必要性について学んでいた。

This study examined the content of student learning through practicum which they accompany specialized/certified nurses in adult nursing practical training. A qualitative study was conducted with 64 out of the 81 fourth-year students of A College of Nursing who agreed to participate in the study. A total of 45 reports on experiences of such practicum were analyzed inductively.

As a result, eleven categories were extracted: “current workplace conditions for specialized/certified nurses”; “state of patients who require specialized nursing care”;

1) 天使大学看護栄養学部看護学科

(2015年3月20日受稿、2015年7月9日審査終了受理)

2) 医療法人セレス さっぽろ神経内科病院

“content of nursing practice in specialized fields” ; “experience in giving direct care to patients” ; “guidance, consultation, and collaboration in nursing” ; “collaboration with various healthcare professionals and other institutions” ; “educational activities and promotion of strategies” ; “creation of the working environment to improve activities” ; “improvement and expansion of activities” ; “new perceptions of specialized/certified nurses” ; and “broadening of perspective and improved motivation.” These categories were classified into four core categories: “understanding of the current state of specialized/certified nurses,” “understanding of specialized nurse activities in specialized fields,” “issues of specialized/certified nurses,” and “changes in student perspective.”

Students were able to directly experience specialized nurse activities performed by specialized/certified nurses. This broadened their views and gave them a new perspective on specialized/certified nursing. Students also learned the necessity of advanced skills and knowledge.

キーワード：成人看護学臨地実習 (adult nursing practical training)

専門看護師 (certified nurse specialist)

認定看護師 (certified nurse)

看護教育 (nursing education)

I. はじめに

看護領域において資格認定制度が発足し、1995年より専門看護分野および認定看護分野の特定が開始されて以来、多くの専門看護師・認定看護師が誕生してきている。これまでに、専門看護分野は11分野、認定看護分野は21分野が特定され、特定分野の数自体も増加し、全体の認定者数は着実に増加してきている。さらに、専門看護師・認定看護師の活動が診療報酬算定の要件として評価されるなど社会的にも認知され、各施設の看護部門においては、在籍している専門看護師や認定看護師をホームページ等で紹介し、活動の説明を行っている。

そのような状況の中で、実習施設においても専門看護師や認定看護師が在籍するようになり、人数も増えてきていることで、病棟での実習の際にも、学生が巡回中の専門看護師や認定看護師を目にする機会や受け持ち患者を通して関わる機会が出てきている。

A 大学では、専門看護師や認定看護師の方が講義の一部を担当している科目があり、学部生が高度な看護実践について直接話を聞く機会は既にあった。さらに、医療の高度化に伴う看護の専門化や専門看護師・認定看護師の活動の現状を理解することは、看護基礎教育においても必要かつ重要と考え、2012年度より4年生が履修する成人看護学臨地実習Ⅱの中で、他職種との連携における看護の専門的な役割について学ぶ目標の中に位置づけ、専門看護師や認定看護師等と同行する実習を開始した。

看護基礎教育の成人看護学領域では、入院治療を要する患者を受け持ち、看護過程の展開を実際に行うことを通して学習していく実習を実施しているため、手術療法や化学療法など高度な治療を受ける患者を受け持つ機会が多い。したがって、以前より手術見学実習等が取り入れられ、看護教育に関する研究として見学実習の効果や工夫に関

する報告¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾が多数なされているが、専門看護師や認定看護師等の同行実習を導入し、その学習効果を検討している研究は見当たらない。

そこで本研究では、成人看護学臨地実習における専門・認定看護師等同行実習の学習効果を検討するため、実習終了後の課題レポートに記述された専門・認定看護師等同行実習での学生の学びの内容を明らかにすることを目的とする。

II. 専門・認定看護師等同行実習の概要

専門・認定看護師等同行実習とは、専門・認定看護師等に1日同行し、専門的な看護活動の実際や役割を学ぶ実習であり、成人看護学臨地実習の病院実習初日、あるいは2日目に組み込まれている。実習施設に在籍している専門看護師や認定看護師等に同行するため、学生が同行する専門・認定看護師等の専門分野は様々であり、学生の経験は一律ではない。また、実習施設によっては、専門看護師や認定看護師ではないが、専門的な看護活動を部署を越えて実践している看護スタッフに同行する場合があるため、実習の名称を“専門・認定看護師等”とした。

III. 研究方法

1. 対象

A 大学看護学科における2012年度の成人看護学臨地実習Ⅱを履修した4年生81名の内、研究協力への同意が得られた64名中、専門・認定看護師等同行実習をレポートテーマに選択した45名の記録を分析対象とした。

2. 分析方法

データ分析は、質的データ分析の帰納的アプローチに従い、研究対象となった記録に記述された内容を学びの類似性に沿って分類し、サブカテゴリー化、カテゴリー化、コアカテゴリー化を行っ

た。信頼性の確保のため、共同研究者間で検討を重ねた上で分析を行った。

3. 倫理的配慮

対象者には、研究の趣旨、研究への協力は任意であり、協力の有無が成績評価に影響しないことを保証すること、データは本研究以外の目的には使用せず、個人が特定できないように処理し、プライバシーの保護を約束すること、さらに、研究結果は学術雑誌等に公表することがあることを文書と口頭で説明し、同意を得た。

なお、本研究は天使大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

1. 学生が同行した専門・認定看護師等の分野

分析対象となった45名の記録から、同行した専門・認定看護師等の分野は、皮膚・排泄ケアおよび創傷ケア27名、がん化学療法看護6名、がん看護3名、がん性疼痛看護2名、緩和ケア2名、集中ケア4名、感染管理5名、退院調整5名、糖尿病看護3名であった。また、1日の同行実習の中で、複数の分野の専門・認定看護師等に同行した学生が7名いた。

2. 同行実習における学生の学び

学生の学びの記述は、意味内容の類似性に沿って分類したところ、41のサブカテゴリー、11のカテゴリー、4つのコアカテゴリーから構成された。以下、コアカテゴリーを【 】,カテゴリーを『 』、サブカテゴリーを< >、主な学びの記述内容を「 」で示す。

1) 専門・認定看護師等に関わる現状の理解

【専門・認定看護師等に関わる現状の理解】のコアカテゴリーは、専門看護師や認定看護師等の実践の場やあり方、実践の対象者に関する現状についての学生の学びであり、『専門・認定看護師等の職場

の現状』『専門的な看護ケアを必要とする患者の現状』の2つのカテゴリーから構成された(表1)。

(1) 専門・認定看護師等の職場の現状

『専門・認定看護師等の職場の現状』としては、2つのサブカテゴリーが抽出された。「皮膚・排泄ケア認定看護師は3名おり、月2回定期的に院内のラウンドを実施している」など、実習施設における専門看護師・認定看護師等の<在籍状況と活動の仕方>を学び、さらに「ストーマ外来」についてや「がん化学療法認定看護師は、外来のがん化学療法センターで働いていた」など、<ケア提供の場>についても学んでいた。

(2) 専門的な看護ケアを必要とする患者の現状

『専門的な看護ケアを必要とする患者の現状』としては、7つのサブカテゴリーが見出された。「がん患者の術後や化学療法を受けている場合では疼痛からあまり動くことができず、褥瘡がしやすい環境にある」や「入院患者は進行・再発がんの割合が高く、それに伴う抗がん剤の作用によるものなど様々なスキントラブルを抱えている」など<創傷ケアを必要とする患者の現状>、「ストーマ合併症を起こすことで、日常生活における活動や社会参加などの生活機能全体が悪循環に陥り、QOLの低下につながる可能性がある」や「羞恥心が強い患者さんも多い」など<ストーマ患者の現状>について知る機会となっていた。さらに、「がん化学療法を受ける患者は、がんと告知されたときからがんに向き合い、手術で切除した場合でも再発という恐怖に向き合うことになる」「抗がん剤の副作用は主要な副作用だけでなく、予想もしていなかった副作用に悩まされることもある」など<がん化学療法を受ける患者の現状>、「治療として麻薬などを使用して鎮痛している場合が多く、感覚が鈍くなって褥瘡の危険性がある」「患者さんは積極的な治療は受けたくないと考え、家族は少しでも長く生きてほしいと思うなど、本人・家族間で治療への思いに差があることもある」など<緩和ケアを必要とする患者・家族の現状>について理

表1.【専門・認定看護師等に関わる現状の理解】について

『カテゴリー』	＜サブカテゴリー＞	記述内容
『職場の現状』	＜在籍状況と活動の仕方＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は3名おり、月2回定期的に院内のラウンドを実施している。 今回は2名の皮膚・排泄ケア認定看護師と一緒に院内各病棟のラウンドを行っていた。
	＜ケア提供の場＞	がん化学療法認定看護師は、外来のがん化学療法センターで働いていた。 看護師が継続看護の必要性を考え、設立したのがストーマ外来である。
『専門的な看護ケアを必要とする患者の現状』	＜創傷ケアを必要とする患者の現状＞	がん患者の術後や化学療法を受けている場合では疼痛からあまり動くことができず、褥瘡ができやすい環境にある。 入院患者は進行・再発がんの割合が高く、それに伴う抗がん剤の作用によるものなど様々なスキントラブルを抱えている。
	＜ストーマ患者の現状＞	ストーマ合併症を起こすことで、日常生活における活動や社会参加などの生活機能全体が悪循環に陥り、QOLの低下につながる可能性がある。 ストーマなどは羞恥心が強い患者さんも多い。
	＜がん化学療法を受ける患者の現状＞	がん化学療法を受ける患者は、がんと告知されたときからがんに向き合い、手術で切除した場合でも再発という恐怖に向き合うことになる。 抗がん剤の副作用は主要な副作用だけでなく、予想もしていなかった副作用に悩まされることもある。
	＜緩和ケアを必要とする患者・家族の現状＞	治療として麻薬などを使用して鎮痛している場合が多く、感覚が鈍くなって褥瘡の危険性がある。 患者さんは積極的な治療は受けたくないと考え、家族は少しでも長く生きてほしいと思うなど、本人・家族間で治療への思いに差があることもある。
	＜集中治療を受ける患者・家族の現状＞	ICUに患者さんが緊急で入ってきて、患者さんの生活で大切にしてきたことなどは見えづらい。 家族は、心の準備をすることなく突然機械を付けられた患者さんの光景を目の当たりにすると茫然としてしまう。
	＜退院調整を要する患者・家族の現状＞	生命維持のために気管切開、人工呼吸器、経管栄養といった高度医療を受けた結果、自宅に戻れず、病院を転々としない患者さんもいる。 特定機能病院であっても、昔から通院していた方にとっては“かかりつけ医”という認識があり、転院に対して心理的抵抗感が強い。
	＜糖尿病患者の現状＞	「人生変えなきゃ」という発言がある位、生活習慣を見直すことに対して多大な負担を感じている。

解していた。また、「ICUに患者さんが緊急で入ってきて、患者さんの生活で大切にしてきたことなどは見えづらい」や「家族は、心の準備をすることなく突然機械を付けられた患者さんの光景を目の当たりにすると茫然としてしまう」など**＜集中治療を受ける患者・家族の現状＞**について学んだ学生もおり、「生命維持のために気管切開、人工呼吸器、経管栄養といった高度医療を受けた結果、自宅に戻れず、病院を転々としない患者さんもいる」「特定機能病院であっても、昔から通院していた方にとっては“かかりつけ医”という認識があり、転院に対して心理的抵抗感が強い」

など**＜退院調整を要する患者・家族の現状＞**についてや、「人生変えなきゃ」という発言がある位、生活習慣を見直すことに対して多大な負担を感じている」という**＜糖尿病患者の現状＞**についても学んでいた。

2) 専門分野に特化した看護活動の理解

【専門分野に特化した看護活動の理解】のコアカテゴリーは、専門看護師や認定看護師等が実践する専門性の高い、高度な看護実践を目の当たりにしたことで得られた学生の学びに関するものであり、『専門分野における看護実践の内容』『患者へ

の直接的ケアの実際』『看護職への指導および相談、 策の推進』の5つのカテゴリから構成された(表連携)『多職種・他施設との連携』『教育活動と対 2)。

表 2-1. 【専門分野に特化した看護活動の理解】について

『カテゴリー』	＜サブカテゴリー＞	記述内容
『専門分野における看護実践の内容』	＜皮膚・排泄ケア分野の実践＞	「創傷ケア」として褥瘡や瘻孔、下腿潰瘍などの創傷ケアや栄養摂取へのケアを行う。
		「ストーマケア」としてストーマ保有者の QOL を保障することである。
		「失禁ケア」として失禁に対する排泄管理方法の指導や失禁にもなう皮膚障害の改善とその予防（スキンケア指導）を行う。
	＜がん化学療法看護分野の実践＞	外来に来院してきた患者の副作用出現による生活面の問題点の有無や副作用の予防策を患者に教育することで、患者の QOL の低下を予防する。
		化学療法を行い、薬剤の副作用が強くなるのは自宅で過ごしている時であり、患者が自分で異常を判断して適切な対処を行えるように教育・指導を行う。
	＜緩和ケア分野の実践＞	痛みは本人にしかわからない主観的なものであるため、実際に患者に直面し観察した上で、患者に合った疼痛緩和の方法、投薬の方法、薬剤増減の調整を行う。
		患者の希望だけを聞くのではなく、家族との関わりも大切にしながら、患者を囲む全ての人々の意向を統合し、今後を予測していっている。
	＜集中ケア分野の実践＞	生命の危機状態にある患者に、病態変化を予測し、重篤化を回避するための援助を提供する。
		生活者としての視点からアセスメントおよび早期回復リハビリテーションの立案・実施（呼吸理学療法、廃用予防などの種々なリハビリテーション）を行う。
＜感染管理分野の実践＞	病院全体の感染や清潔操作について現状を把握し、病院の改善点をデータを使いながら示すことである。	
	感染予防のための活動を、病院全体の様々な職種の人に教育・指導を行う。	
＜退院調整・退院支援分野の実践＞	退院または転院する患者さんの転院先の病院を探し連絡を取ることや、在宅療法を行う患者さんの訪問看護サービスの情報提供などを行う。	
	家族・患者が理解しやすいように、転院先の病院や、施設の概要、経済的な負担の程度、今利用できる病院・施設などの説明を行う。	
＜糖尿病看護分野の実践＞	患者が主体的に取り組み、自分で原因を考えて糖尿病を改善できるよう、一人一人の個性にあったアドバイスや情報提供を行っている。	
	患者がセルフケアできていることや生活の中で努力していることなどについては、労いや頑張りを認める言葉を掛け、注意すべき食べ物など不足している知識を補う。	
『患者への直接的ケアの実際』	＜専門的な知識や経験に基づいたアセスメント・判断＞	この部分に褥瘡ができることは考えにくく原因不明であるが、ペットボトルのふたが原因かもしれないと推測していた。
		外来へ来院した患者は状態が悪化しており、独居であることやがん化学療法のエンドステージへと移行する時期と判断し、入院を勧めた。
	＜個別性を踏まえたケア＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は、患者の体形や自分で処置しやすい位置、退院後の服装などを考慮してストーマ造設部位をマーキングしていた。
		皮膚・排泄ケア認定看護師は、肌の弱い人に対してはできるだけ低刺激のものをと、病院では使用していない洗剤でも取り寄せを行ったりするなどしていた。
	＜個別性・安全・コストを意識したケアや技術の工夫＞	皮膚をケアする上で、泡状になって出てくる石鹸や保護シール、皮膚を覆うラップや薬剤など様々なものをその都度調整し工夫しながら使っている。
使用直前に開封して使用するなど抗がん剤による暴露を最小限にとどめるといった工夫を行っていた。 認定看護師はできるだけ患者に負担がかからないようコストを抑えた器具を購入していることを伺った。		
＜患者を支える・心理的なサポート＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は、ケアを行う際に限られた時間でも声かけを忘れることなく、対象者との関係性を築くことを大切にしていた。	
	がん患者にとって意思決定が難しい時には IC に同席し、その後意思決定に必要な情報を提供したり、想いを傾聴する。	

表2-2.【専門分野に特化した看護活動の理解】について

『カテゴリー』	＜サブカテゴリー＞	記述内容
『看護職への指導および相談、連携』	＜看護職への直接的な指導＞	人工呼吸器の回診により、病棟看護師に呼吸器の取り扱い方法や適切な管理の方法、呼吸器装着患者へのケア実施方法などを指導する。 褥瘡マットが不適切に使用されないことがないように、看護実践を通して看護職に対して指導を行う。
	＜コンサルテーション＞	他の病棟などからコンサルテーションを受け、それに対してアセスメントを行い、どのようなケアを行っていくことが必要か判断して実践・指導している。 気管内チューブが挿入されている方の口腔内を清潔にする際に出血してしまうため、今のケアよりもっと良い方法はないのか、相談や調整を行う場面があった。
	＜統一したケア・継続看護の提供に向けた働きかけ＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は患者に皮膚のケアを実施後、病棟看護師に今後実施してほしいケアの方法を伝え、患者に一貫したケアが継続できるようにしていた。 ストーマ造設患者の次のパウチ交換に立ち会うことができない場合には判断の基準を伝え、どのパウチに変更するのか病棟看護師が困らないよう助言していた。
	＜他の認定看護師との連携＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は、外来の化学療法を受けストーマ造設を行った患者に関して、がん化学療法看護認定看護師との情報共有や調整を行っていた。
		集中ケア認定看護師は、人工呼吸器装着患者は感染のリスクが高まり、肺炎のおそれもあることから、感染管理認定看護師との連携も行っている。
『多職種・他施設との連携』	＜多職種との連携・調整の必要性＞	認定看護師ができることと組織が求める役割について話し合い、スタッフと組織と協働し、質の高い看護ケアを目標にしていくことの大切さを感じることができた。 皮膚・排泄ケア認定看護師が単独でストーマ外来を運営するのではなく、医師、緩和ケア・がん化学療法看護等の他の認定看護師、訪問看護師など、多くの他職種との連携が必要不可欠であることがわかった。
	＜多職種との連携・調整の実際＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は、薬剤師とも話をして現在皮膚に使用している薬剤が適切であるか相談していた。 感染管理認定看護師は、各部位の手術によって感染症の起こる頻度をデータ化し、それを医師などに伝えて改善を図るよう検討している。
	＜多職種とのコミュニケーションの重要性＞	医師やNST、他の認定看護師、病棟看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、事務などとのコミュニケーションが上手くいっていなければ、情報を得るのも指導もままならなくなる可能性がある。 感染管理認定看護師は教育や指導を行う立場でもあり、改善するためにはコストがかかることもあるため、職員と人間関係を良好に保つことがとても大切だと感じた。
	＜院外・地域での連携の広がり＞	他病院と連携を図りながら感染管理の向上を企画し、実施する段階であるということも知ることができた。
		実習病院は訪問看護ステーションもあり、褥瘡や創傷がある療養者の訪問の時には一緒に訪問して傷をみてほしいと声をかけられることもあるという。
『教育活動と対策の推進』	＜教育活動＞	感染管理認定看護師は病棟にとどまらず、院内全体の感染に対する講習を開催したり、院内感染の対策講演を開いている。
		スタッフに創傷ケアについて何がわからないのかをアンケートで聞き、それをもとに講義を開き、講義をDVDにして病棟に配るという活動も行っている。
	＜対策の推進＞	感染管理認定看護師はサーベイランスだけでなく、院内感染対策委員会を立ち上げることや感染対策マニュアルの作成・訂正、院内ラウンド、職業感染対策を行っている。 創傷ケア委員会では、創傷の種類からその創傷に合った処置の方法を書いたフローチャートを作成していた。

(1) 専門分野における看護実践の内容

『専門分野における看護実践の内容』とは、本実習で課された事前学習に加えて、同行実習中に専門・認定看護師等からも直接説明を受けて学んでいた専門分野における看護実践の内容であり、7

つのサブカテゴリーが見出された。「創傷ケア」「ストーマケア」「失禁ケア」を行う＜皮膚・排泄ケア分野の実践＞や、「化学療法を行い、薬剤の副作用が強くなるのは自宅で過ごしている時であり、患者が自分で異常を判断して適切な対処を行えるよ

うに教育・指導を行う」などの**＜がん化学療法看護分野の実践＞**について、「痛みは本人にしかわからない主観的なものであるため、実際に患者に対面し観察した上で、患者に合った疼痛緩和の方法、投薬の方法、薬剤増減の調整を行う」などの**＜緩和ケア分野の実践＞**についても、専門・認定看護師等から説明を受けた上で学んでいた。さらに、「生命の危機状態にある患者に、病態変化を予測し、重篤化を回避するための援助を提供する」や「生活者としての視点からアセスメントおよび早期回復リハビリテーションの立案・実施（呼吸理学療法、廃用予防などの種々なリハビリテーション）を行う」という**＜集中ケア分野の実践＞**、「病院全体の感染や清潔操作について現状を把握し、病院の改善点をデータを使いながら示すこと」や「感染予防のための活動を、病院全体の様々な職種の人に教育・指導を行う」などの**＜感染管理分野の実践＞**、「家族・患者が理解しやすいように、転院先の病院や、施設の概要、経済的な負担の程度、今利用できる病院・施設などの説明を行う」などの**＜退院調整分野の実践＞**や、「患者が主体的に取り組み、自分で原因を考えて糖尿病を改善できるよう、一人一人の個性にあったアドバイスや情報提供を行っている」「患者がセルフケアできていることや生活の中で努力していることなどについては、労いや頑張りを認める言葉を掛け、注意すべき食べ物など不足している知識を補う」といった**＜糖尿病看護分野の実践＞**についても学ぶことができていた。

(2) 患者への直接的ケアの実際

『患者への直接的ケアの実際』とは、同行実習中に目の当たりにした専門・認定看護師等が行う卓越した看護・水準の高い看護ケアの実際についての学びであり、4つのサブカテゴリーが見出された。「この部分に褥瘡ができることは考えにくく原因不明であるが、ペットボトルのふたが原因かもしれないと推測」したり、「外来へ来院した患者は状態が悪化しており、独居であることやがん化学

療法のエンドステージへと移行する時期と判断し、入院を勧めた」など**＜専門的な知識や経験に基づいたアセスメント・判断＞**の実際や、「患者の体形や自分で処置しやすい位置、退院後の服装などを考慮してストーマ造設部位をマーキングしていた」「肌の弱い人に対してはできるだけ低刺激のものと、病院では使用していない洗剤でも取り寄せを行ったりする」など、皮膚・排泄ケア認定看護師が実践する**＜個別性を踏まえたケア＞**の実際を学ぶことができていた。また、「皮膚をケアする上で、泡状になって出てくる石鹸や保護シール、皮膚を覆うラップや薬剤など様々なものをその都度調整し工夫しながら使っている」「使用直前に開封して使用するなど抗がん剤による暴露を最小限にとどめるといった工夫を行っていた」「できるだけ患者に負担がかからないようコストを抑えた器具を購入している」など**＜個別性・安全・コストを意識したケアや技術の工夫＞**についてや、「ケアを行う際に限られた時間でも声かけを忘れることなく、対象者との関係性を築くことを大切にしていた」や「がん患者にとって意思決定が難しい時にはICに同席し、その後意思決定に必要な情報を提供したり、想いを傾聴する」など**＜患者を支える・心理的なサポート＞**の実際についても学び、理解できていた。

(3) 看護職への指導および相談、連携

『看護職への指導および相談、連携』とは、各部署の看護スタッフに直接行う指導や依頼を受けての相談、ケアの統一や継続および専門性の補完のために行う看護職種間の連携についての学びであり、4つのサブカテゴリーから構成された。学生は、「人工呼吸器の回診により、病棟看護師に呼吸器の取り扱い方法や適切な管理の方法、呼吸器装着患者へのケア実施方法などを指導する」「褥瘡マットが不適切に使用されることがないように、看護実践を通して看護職に対して指導を行う」など**＜看護職への直接的な指導＞**や、「気管内チューブが挿入されている方の口腔内を清潔にする際に出

血してしまうため、今のケアよりもっと良い方法はないのか、相談や調整を行う場面」を見学することで<コンサルテーション>の実際を学んでいた。さらに、「皮膚・排泄ケア認定看護師は患者に皮膚のケアを実施後、病棟看護師に今後実施してほしいケアの方法を伝え、患者に一貫したケアが継続できるようにしていた」「ストーマ造設患者の次のパウチ交換に立ち会うことができない場合には判断の基準を伝え、どのパウチに変更するか病棟看護師が困らないよう助言していた」など<統一したケア・継続看護の提供に向けた働きかけ>と、「皮膚・排泄ケア認定看護師は、外来の化学療法を受けストーマ造設を行った患者に関して、がん化学療法看護認定看護師との情報共有や調整」を行っていたり、「集中ケア認定看護師は、人工呼吸器装着患者は感染のリスクが高まり、肺炎のおそれもあることから、感染管理認定看護師との連携も行っている」など、<他の認定看護師との連携>についても学んでいた。

(4) 多職種・他施設との連携

『多職種・他施設との連携』とは、院内における多職種との連携やチームとしての活動の実際を見学したことで得られた学びであると共に、院外や他施設との連携の広がりに関する学びであり、4つのサブカテゴリーから構成された。「皮膚・排泄ケア認定看護師が単独でストーマ外来を運営するのではなく、医師、緩和ケア・がん化学療法看護等の他の認定看護師、訪問看護師など、多くの他職種との連携が必要不可欠であることがわかった」というように、学生は<多職種との連携・調整の必要性>について学び、「皮膚・排泄ケア認定看護師は、薬剤師とも話をして現在皮膚に使用している薬剤が適切であるか相談していた」「感染管理認定看護師は、各部位の手術によって感染症の起こる頻度をデータ化し、それを医師などに伝えて改善を図るよう検討している」など、<多職種との連携・調整の実際>についても学んでいた。さらにそこから、「医師やNST、他の認定看護師、病

棟看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、事務などとのコミュニケーションが上手くいっていないければ、情報を得るのも指導もままならなくなる可能性がある」など、<多職種とのコミュニケーションの重要性>を学んでおり、「他病院と連携を図りながら感染管理の向上を企画し、実施する段階である」ということや、「実習病院は訪問看護ステーションもあり、褥瘡や創傷がある療養者の訪問の時には一緒に訪問して傷をみてほしいと声をかけられることもある」ということから、<院外・地域での連携の広がり>についても学ぶことができていた。

(5) 教育活動と対策の推進

『教育活動と対策の推進』とは、より多くのスタッフを対象とした教育的な企画の実施であったり、病院全体を対象に推し進めている対策についての学びであり、2つのサブカテゴリーから構成された。学生は、「感染管理認定看護師は病棟にとどまらず、院内全体の感染に対する講習を開催したり、院内感染の対策講演を開いている」「スタッフに創傷ケアについて何がわからないのかをアンケートで聞き、それをもとに講義を開き、講義をDVDにして病棟に配るといった活動も行っている」などの<教育活動>や、「感染管理認定看護師はサーベイランスだけでなく、院内感染対策委員会を立ち上げることや感染対策マニュアルの作成・訂正、院内ラウンド、職業感染対策を行っている」「創傷ケア委員会では、創傷の種類からその創傷に合った処置の方法を書いたフローチャートを作成していた」など、<対策の推進>についても学んでいた。

3) 専門・認定看護師等の課題

【専門・認定看護師等の課題】のコアカテゴリーは、専門看護師や認定看護師等が活動を行っていく上での課題や目標とする看護ケアの水準に到達するための課題に関する学生の学びであり、『活動の充実へ向けた基盤作り』『活動の充実および拡大』の2つのカテゴリーから構成された(表3)。

表3.【専門・認定看護師等の課題】について

『カテゴリー』	＜サブカテゴリー＞	記述内容
『活動の充実へ向けた基盤作り』	＜資格取得や活動に対する支援＞	認定看護師の取得の際に休みが取れなかったりするなど、病院によっては認定看護師の資格取得環境が整っていない所もある。 資格取得までのサポートの他にも、現場での役割を十分に発揮し、活動を広げていけるようなサポート体制を整備していく必要がある。
	＜活動時間の確保＞	今回の病院では認定看護師は1人であったり、しかも専従ではないため、週1回しか活動できていない現状である。 1人でケアする時間に対し、患者が多く、限界がある。
	＜社会における活動環境の整備＞	患者のニーズを考え必要な看護を提供できる場を作っていくことが、ストーマ外来に限らず、継続した看護を行っていくための課題となる。 皮膚・排泄ナースは人数も増えているが、新しい分野は未だに認知度が低く、活動の成果が診療報酬の評価を得るまでに至っていない現状がある。
	＜院内・地域へ向けた役割・活動の周知＞	社会に認定看護師の存在や役割を知ってもらうことである。 認定看護師の高い水準の看護実践を広め、その存在をアピールし、活躍の場を広めていく必要がある。
『活動の充実および拡大』	＜教育活動の充実＞	疼痛コントロールに関しては、認定看護師や専門看護師の知識や技術を利用して、病棟内においても緩和ケアにおける知識や技術の向上が必要である。 皮膚・排泄ケアの課題は、病棟によって理解の程度や知識・技術がバラバラであり、まだ患者に統一したケアを提供するに至っていないことである。
	＜患者へのケアの充実＞	皮膚・排泄ケア認定看護師の今後の課題は、スキントラブルに苦しむ患者の苦痛が早期に軽減されるようにすることである。 より高度な医療を目指すために、皮膚・排泄ケアの創傷ケアとストーマケア、失禁ケアを分化させることが課題だと言われている。
	＜院内・在宅・地域への継続看護に向けた連携・支援の充実および拡大＞	病棟と外来の連携、継続看護をしていくことが今後の課題となる。 情報提供・情報共有の場をいかに整えるのか、病院の中だけでなく地域や在宅にどのようにケアを移行していくかが課題となっている。

(1) 活動の充実へ向けた基盤作り

『活動の充実へ向けた基盤作り』とは、専門・認定看護師等の活動の基盤となる資格取得や時間確保、環境整備に関する課題であり、4つのサブカテゴリーが抽出された。「認定看護師の取得の際に休みが取れなかったりするなど、病院によっては認定看護師の資格取得環境が整っていない所もある」「現場での役割を十分に発揮し、活動を広げていけるようなサポート体制を整備していく必要がある」などの＜資格取得や活動に対する支援＞や、「専従ではないため、週1回しか活動できていない現状である」「1人でケアする時間に対し、患者が多く、限界がある」などの＜活動時間の確保＞に関する課題を学生は捉えることができていた。さらに、「皮膚・排泄ナースは人数も増えているが、

新しい分野は未だに認知度が低く、活動の成果が診療報酬の評価を得るまでに至っていない現状がある」ということから＜社会における活動環境の整備＞や、「社会に認定看護師の存在や役割を知ってもらうことである」「認定看護師の高い水準の看護実践を広め、その存在をアピールし、活躍の場を広めていく必要がある」などの＜院内・地域へ向けた役割・活動の周知＞についても課題があることを、学生は専門・認定看護師等の率直な意見を聞くことで学ぶことができていた。

(2) 活動の充実および拡大

『活動の充実および拡大』とは、目標とする看護ケアの水準に到達するために活動の充実および拡大が必要であると、専門・認定看護師等が考えている課題であり、3つのサブカテゴリーから構成

された。「病棟内においても緩和ケアにおける知識や技術の向上が必要である」「皮膚・排泄ケアの課題は、病棟によって理解の程度や知識・技術がバラバラであり、まだ患者に統一したケアを提供するに至っていないことである」ということから**教育活動の充実**や、「スキントラブルに苦しむ患者の苦痛が早期に軽減されるようにすることである」「より高度な医療を目指すために、皮膚・排泄ケアの創傷ケアとストーマケア、失禁ケアを分化させることが課題だと言われている」など**患者へのケアの充実**を図ることがさらに必要であることを学生は学んでいた。さらに、「情報提供・情報共有の場をいかに整えるのか、病院の中だけでなく地域や在宅にどのようにケアを移行していくかが課題となっている」というように、**院内・在宅・地域への継続看護に向けた連携・支援の充実および拡大**が今後より必要とされることについても、専門・認定看護師等の課題として学生は理解していた。

4) 学生の認識の変化

【学生の認識の変化】のコアカテゴリーは、同行

実習を終えて学生が自覚した認識の変化や気づきについての記述であり、『専門・認定看護師等に対する新たな認識』『視野の広がり」と意欲の向上』の2つのカテゴリーから構成された(表4)。

(1) 専門・認定看護師等に対する新たな認識

『専門・認定看護師等に対する新たな認識』とは、専門・認定看護師等の活動の実際や取り組みの姿勢を知ったことで生じた新たな認識に関するものであり、2つのサブカテゴリーが抽出された。「常に対象者に何が一番安楽なのか考え、学習し続けている姿に驚いた」「毎日多くの人が手術を受けている中で全員を見ていることに正直驚いた」など、学生は専門・認定看護師等の**実践・技術・姿勢に対する理解と尊敬**の念を抱くようになっており、さらには「多様な皮膚の病変に対応していくために、非常に多くの知識や技術が必要であると感じた」とあるように、**豊富な知識と技術の必要性**を改めて認識していた。

(2) 視野の広がり」と意欲の向上

『視野の広がり」と意欲の向上』とは、同行実習により得られた今後の自己の看護実践や将来に対する考えの広がり」と、改めて認識された学びたいな

表4. 【学生の認識の変化】について

『カテゴリー』	＜サブカテゴリー＞	記述内容
『専門・認定看護師等に対する新たな認識』	＜実践・技術・姿勢に対する理解と尊敬＞	認定看護師として常に対象者に何が一番安楽なのか考え、学習し続けている姿に驚き、学びたいと思った。
		手術では褥瘡や皮膚トラブルのリスクから個別に関わっていると思うが、毎日多くの人が手術を受けている中で全員を見ていることに正直驚いた。
	＜豊富な知識と技術の必要性＞	皮膚・排泄ケア認定看護師は、多様な皮膚の病変に対応していくために、非常に多くの知識や技術が必要であると感じた。
		限られた時間の中で必要な情報を聞き出し、徐々に変わっていく患者の状態を把握し理解するには、認定看護師の専門的知識や技術が必要である。
『視野の広がり」と意欲の向上』	＜自己の視野の広がり＞	今後は、退院に向かって存在として、患者さんやその家族がどのような目標を持っているのかを傾聴し理解することで、どのような問題があり介入が必要なのかを考えながら関わっていきたいと思う。
		今後の自分の将来についての視野が広がったと考える。
	＜専門・認定看護師等に関する更なる勉学の意欲＞	今回同行した領域以外の専門・認定看護師の具体的なケアの内容や専門看護師、認定看護師の連携についてさらに知識を深めたいと感じた。 今後臨床に出た時に、認定看護師と関わる機会もあるため、この実習を思いだして一緒に連携して看護を行っていきたいと考える。

どの欲求であり、2つのサブカテゴリーが抽出された。患者や家族を退院に向かっている存在として理解した上で「どのような問題があり介入が必要なのかを考えながら関わっていききたいと思う」という退院調整看護師に同行した学生の記述や、「今後の自分の将来についての視野が広がったと考える」など、**<自己の視野の広がり>**に関する認識がなされていた。さらに、「今回同行した領域以外の専門・認定看護師の具体的なケアの内容や専門看護師、認定看護師の連携についてさらに知識を深めたいと感じた」というように、**<専門・認定看護師等に関する更なる勉学の意欲>**も生じていた。

V. 考察

専門・認定看護師等同行実習における学生の学びから見えた学習効果について、以下に考察する。

【専門・認定看護師等に関わる現状の理解】として、『専門・認定看護師等の職場の現状』に関することと共に、ケアを受ける患者に関する記述が多く見受けられた。学生は、同行した専門・認定看護師等より看護ケア提供の対象者である患者について説明を受け、**<創傷ケアを必要とする患者の現状><がん化学療法を受ける患者の現状><緩和ケアを必要とする患者・家族の現状>**など、『専門的な看護ケアを必要とする患者の現状』について理解を深めることができたと考えられる。専門・認定看護師等からの説明は、文献等に記載されている内容にとどまらず、看護実践の実体験に基づくものであることから、より現実的な話として理解が進んだと推察される。また、多くの学生が実際の看護ケアの場面にも参加しており、そこでの患者の様子を直接見学できたことも、患者の現状を知ることにつながったと考えられ、受け持ち患者の看護を行う病棟実習のみでは得られがたい体験となったと考えられる。青木ら⁶⁾は、成人看護実習において受け持ち患者の看護過程を展開

する実習の他に、看護師に同行して現実的な実践を反映した場に参加する体験型実習を導入しており、「受け持ち患者の看護過程を展開する実習では学習機会が限られる治療法や健康問題を持って生活するという患者への看護体験」が得られると予測されると述べている。受け持ち患者の看護過程を展開する病棟での実習では、学生の学習段階に応じて関わる患者や学習する治療内容・看護ケアが限られてくるが、専門・認定看護師等の同行実習を行うことにより、様々な状況に置かれ、より専門的な看護ケアを必要とする患者について幅広く知る、学びの機会になったのではないかと考える。

次に【専門分野に特化した看護活動の理解】では、専門・認定看護師等が行う水準の高い看護ケアに関する学びが見受けられた。学生は、事前学習に加え、看護実践の内容を専門・認定看護師等から直接説明を受けており、**<皮膚・排泄ケア分野の実践><がん化学療法看護分野の実践>**など、『専門分野における看護実践の内容』について学ぶことができていた。さらに、専門・認定看護師等が行う患者への直接的ケア、特に、皮膚・排泄ケア認定看護師等が行う難治性の創傷・褥瘡に対するケアやストーマケア、がん化学療法看護認定看護師が行うケア等の見学から、『患者への直接的ケアの実際』として**<専門的な知識や経験に基づいたアセスメント・判断>**や、**<個別性を踏まえたケア><個別性・安全・コストを意識したケアや技術の工夫>**の実際を学ぶことができていた。学習の途中段階にある学生にとって、患者の個別性を踏まえることや臨機応変にケアや技術を工夫することは難易度が高く、実際に行うのは難しい段階にあるが、高度な看護実践を目の当たりにし、専門性の高い看護ケアとは何かを理解し、イメージを持つことができたと思われる。また、専門・認定看護師等がケアを行う際に限られた時間でも患者に声をかける姿や思いを傾聴する姿から、**<患者を支える・心理的なサポート>**も行っていることを学んでいた。実習の一部として導入している

見学実習や新たな場での実習における学生の学びについて報告が様々なされているが、橋田ら⁷⁾は、成人看護学実習(急性期)で導入しているICU見学実習について、学生が主体的に看護を展開することは難しく見学中心となるが、看護師の看護ケアを客観的に観察でき、援助の特徴を捉えることができたと考察している。また、山本ら⁸⁾は、在宅看護実習に取り入れている通所系サービス実習について、訪問看護や病棟看護とは異なった看護の介入方法を学んでいたと報告している。これらの先行研究から、専門・認定看護師等同行実習においても学生が看護を直接展開することはなく見学中心となるが、それゆえ専門・認定看護師等の高度な直接的ケアを観察し、解説も受けることで、どのような判断や意図によって看護ケアが行われているのかを学ぶことができたと考えられる。さらに、病棟実習における受け持ち患者への看護は、学生が実践することから個別性を考慮しつつも基本的にできるだけ忠実なものになることが多いが、専門・認定看護師等が行う看護はそれとは異なり、より個別性を踏まえた、臨機応変な看護ケアの実際を学ぶことができていたと考える。

さらに、【専門分野に特化した看護活動の理解】として、看護職種間を含む多職種との連携に関する学びがあった。『看護職への指導および相談、連携』としては、専門・認定看護師等による<看護職への直接的な指導><コンサルテーション>の他に、<統一したケア・継続看護の提供に向けた働きかけ>や<他の認定看護師との連携>に関する学びがあり、『多職種・他施設との連携』として<多職種とのコミュニケーションの重要性>に関する学びが見受けられた。学生は、同行した専門・認定看護師等が患者への直接的なケアを行うだけでなく、病棟の看護スタッフに働きかけたり、他の認定看護師と共にチームで活動している姿を見学したことで、様々な立場の人との関係のとり方や職種間のコミュニケーションの重要性についても学ぶ機会になったと考えられる。近年、医療

系の教育現場では多職種連携教育の重要性が強調されるようになり、様々な大学での取り組みが報告されている⁹⁾¹⁰⁾。その中で、原ら¹¹⁾は、「各専門職の垣根を超えて異なる職種とのコミュニケーションができること」を目標とした多職種連携教育による学習システムの検討を行い、「コミュニケーション・スキルアップ実習」と「仮想チーム医療実習」を試行した結果を報告している。このことから、多職種とコミュニケーションをとる力は必要不可欠であり、重要視されていると言える。今回の同行実習で、学生は<多職種との連携・調整の実際>を見学し、<多職種との連携・調整の必要性>だけではなく、<多職種とのコミュニケーションの重要性>についても学んでおり、同行実習における重要な学びの一つであると考えられる。

最後に【学生の認識の変化】として、『専門・認定看護師等に対する新たな認識』と『視野の広がりや意欲の向上』について述べる。学生は、同行実習を通して、専門・認定看護師等の<実践・技術・姿勢に対する理解と尊敬>の念を抱くようになっており、<豊富な知識と技術の必要性>をより実感するようになったと考えられる。また、「自分の将来についての視野が広がった」「今回同行した領域以外の専門・認定看護師についてさらに知識を深めたいと感じた」というように、<自己の視野の広がり><専門・認定看護師等に関する更なる勉学の意欲>に関する記述が見受けられた。板東ら¹²⁾は、手術見学実習における学習経験の構造について「知識レベルの学習経験が、手術見学実習を行うことにより学生の情動が揺さぶられ」、「看護者としての成長欲求の高まり」へと深まっていく構造であると述べている。今回の同行実習においても、知識レベルの学習経験であったものが、より専門的な看護活動に学生が直接接触することによって専門・認定看護師等のレベルの高さを知り、尊敬の念を抱くことで、更なる勉学の意欲という成長欲求の高まりへとつながったのではないかと考える。さらに浅井ら¹³⁾は、医療施設の看護管理

者が看護師のキャリア開発において近隣大学に期待することとして、「看護基礎教育において自己のキャリア開発に主体的に取り組む姿勢を培うこと」を明らかにしているが、専門・認定看護師同行実習は自己の将来についての視野の広がり期待できる側面もあり、学生が自己のキャリア開発について考える一助にもなったのではないかと考える。

以上より、専門・認定看護師等同行実習を通して学生は、専門的な看護ケアを必要とする患者の現状や水準の高い看護ケアの実際、多職種との連携とコミュニケーションの重要性について学び、さらには新たな認識や視野の広がりを得ることもできたと考えられ、1日という短時間の同行実習ではあるが、学びの視点も多様で有用な実習であることが推察された。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究は、レポートテーマに専門・認定看護師等同行実習を選択した学生の記録を分析対象としたため、本実習を行った学生全員の学びを分析できていないこと、同行した専門・認定看護師等の分野も同行実習の実際を反映できていない可能性があり、偏りが生じていることも考えられることから、結果の一般化には限界がある。また、同行した専門・認定看護師等の専門分野が多岐にわたり、専門・認定看護師ではないエキスパートナースにも同行していることなどによる学生個々の学習内容の違いについては言及できていない。

今後は、専門・認定看護師等同行実習を通して専門的な看護活動や多職種連携についての学生の理解を促すために、より効果的な実習になるよう検討を重ねていくことが課題である。

VII. 結論

1. 専門・認定看護師等同行実習における課題レポートに記述された学生の学びの内容は、【専

門・認定看護師等に関わる現状の理解】【専門分野に特化した看護活動の理解】【専門・認定看護師等の課題】【学生の認識の変化】の4つのコアカテゴリーから構成され、11のカテゴリー、41のサブカテゴリーが見出された。

2. 専門・認定看護師等同行実習を通して、学生は、専門的な看護ケアを必要とする患者の現状や、より個別性を踏まえた、臨機応変な看護ケアの実際、多職種との連携の実際から様々な立場の人との関係のとり方や職種間のコミュニケーションの重要性についても学ぶことができたと考えられる。さらに、自己の将来について視野の広がり期待できる側面もあり、学生が自己のキャリア開発について考える一助にもなった可能性がある。
3. 1日という短時間の同行実習ではあるが、受け持ち患者の看護過程を展開する病棟での実習では限られる可能性のある学習の機会を得ることができ、学びの視点も多様で有用な実習であることが推察された。

引用文献

- 1) 板東孝枝他：手術患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験，日本看護学教育学会誌，22(2)，13-25，2012.
- 2) 橋田由吏他：成人看護学実習(急性期)におけるICU見学実習での学生の学習内容－ICU見学実習後のレポートから，学生が捉えた患者・家族・看護師の体験の分析，香川県立医療短期大学紀要，4，175-182，2003.
- 3) 近藤裕子他：透析センター見学実習における看護学生の透析者への理解－成人看護学実習における記録の分析から，愛知きわみ看護短期大学紀要，6，87-91，2010.
- 4) 板東孝枝他：成人看護学実習における「手術室見学実習観察項目表」を導入した実習の学習効果の検討，The Journal of Nursing

Investigation, 11(1-2), 51-58, 2013.

- 5) 砂賀道子他：成人看護学実習 I における手術室見学の実態と教育的サポートに関する研究, 高崎健康福祉大学紀要, (11), 111-121, 2012.
- 6) 青木きよ子他：成人看護実習で実施している看護師同行実習における技術経験, 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究, 5(1), 82-90, 2009.
- 7) 前掲論文 2)
- 8) 山本美弥・御田村相模：通所系サービス実習における学生の学び—学生の実習体験感想から, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 6, 1-6, 2010.
- 9) 木内祐二他：【多職種連携教育】昭和大学の体系的、段階的なチーム医療教育カリキュラム, 医学教育, 45(3), 163-171, 2014.
- 10) 大塚真理子：【多職種連携教育】医学部がない大学における IPE の取り組み—大学間連携による IP 演習の実現, 医学教育, 45(3), 145-152, 2014.
- 11) 原修一他：異なる医療専門職を目指す学生交流をツールとした保健科学部の実践的取組, 九州保健福祉大学研究紀要, (11), 135-140, 2010.
- 12) 前掲論文 1)
- 13) 浅井美千代他：看護管理者のとらえた看護師のキャリア開発上の課題と近隣大学に期待すること, 千葉県立保健医療大学紀要, 5(1), 71-76, 2014.